

# 大学人の知的心象

梶原 博

University professionals' mind-set

— Long range effects of the socialization process —

Hiroshi KAJIHARA

## 1. はじめに

大学教育というものが転換点にさしかかっていることは、誰もが否定できないことです。このことは様々な現象に現れていますが、我々が直面している負の現象を考えるならば、以下のことが目の前の問題としてあげられるでしょう。

- 4年制大学において卒論指導が年々困難になっていること。マスプロの授業が少々うまくいかなかったとしても平気な場合でも、人格的関係をも含む卒論指導がうまくいかないとなると、心身の疲労感は極めて大きなものになります。それ以上に、卒論を学生が書けなくなるということは、たとえ彼等が専門的学者にならなかつたとしても、大学という組織に対する内的帰属感を蝕み、まじめな教官であればあるほど、自分の論文が書けない以上に自己のモラルを低下させることになるでしょう。
- 技術と学問との間で揺らぐ短大。私が赴任してから3年間を見ても、「資格」に対する大学側の志向は高まるばかりですが、学内制度上の問題や学生の気質の急激な変化のために、このような志向は早くも行き詰まっています。過密な資格試験スケジュールを年間スケジュールの中で議論することはもちろん、学科による資格取得への優先順位や、何のための技術(資格)なのか一度も議論されたこと

はありません。他方、学生と教官をつなぐものがその教官の学問的背景——「背景」であって、学問そのものではないことに注意すべきでしょう——であることも明らかになりつつあります。

- そして教官における学生の「モラル」に対する危機感。気になるのは、学生の「モラル」が本当に低下しているのかどうかではなく(もちろんそれ自身問題ですが)、教官がそのように感じた後の対応の方です。授業を聞かないことの意味を学生の気質のみに安易に還元し、自分の「研究」に閉じこもろうとする。あるいは、マスプロの授業が授業として成立しないことを最初から決めつけようとする。様々な制度上の壁を理由にして、組織としての大学の在り方を論じない、あるいは論じることを諦める。優秀な教官ほど、一面で学内制度問題に背を向けていく傾向が厳然としてあります。

こうした問題の特徴を一言で言うならば、我々大学人が今なお、「大学の大量化」ということを一度もまじめに考えたことがない、という点につきると思います。授業のマスプロ化、学力の「低下」など、個々の現象からみた「大量化」は経験的に知ってはいても、そのことのもつ社会的な「意義」は考慮しない。「本を読む」、「ものごとを考える」ことを至上の価値と信じて、「本を読まない」、「ものごとを考えない」こ

とへの価値の在り方には思いを至らせない。確かに「本を読むこと」、「ものごとを考えること」は、大学人を大学人たらしめる必須の要件でしょう。これらの技術によって、我々は職業人としての誇りを築き、保っているわけですから、そうしたものに對する価値観を捨てるわけにはいかないと思います。

しかしながら、我々が職業人として相對しているのは、「本を読まない」「ものごとを考えない」個人々人ではなく、一定の社会的な価値観であり、一定の社会システムであることを思うならば、一度は大学人の持っている価値観を相對化し、彼我の価値観を對決させる作業が必要になるのではないのでしょうか。

## 2. 研究者生活というもの

### 2.1 個(孤)への志向

現在を大学の転換点としてとらえ、先に取上げたような問題が本当に「問題」であるならば、我々の価値観の中にある、独特の孤立主義を考えざるを得ません。

学生が授業についていけず、論文を書けなくなっても、大学人がそれなりに日々の生活に危機感を覚えずにすむのは、自分をまず研究者としてとらえ、そのようにとらえることについて世間にはばかることがないからです。

我々のキャリアの出発点には、研究對象に對する感動があります。こうした感動はその後の研究への情熱に繋がっていくわけですが、こうした感動や情熱は優れて個人的なものであることを自覚した上で、おそらく多くの研究者はそのキャリアのどこかで自分が「知的独立やくざ」であることを宣言したことがあるかと思えます。自己のキャリアに思いを重ねることで、感動や情熱の源である個人を最大限擁護するシステムとして大学をとらえることにもなります。わが国のように、教育制度を含めた社会の全面にわたって、個人の自由を抑圧するシステムができ上がっている国においては、この面で大学というシステムの意義は大きいものとならざるをえないでしょう(ガス抜きという意味でも)。

個人的自由主義を前提にするならば、すなわち、個人がある對象に對して「感動」し「情熱」を持つことを大学の出発点におくならば、我々と学生の關係は常に個と個の關係に還元されます。とすると、個人に発する情念がすべての人間と共有できるわけではないのですから、情念を共有できないことを理由として学生との接觸を断つことに対して、何ら原則的な不都合は生じないこととなります。

### 2.2 日常生活における手段への情熱

学生との接觸を断つ、直截な言い方をするならば、学生を切る過程についてももう少し見てみましょう。

「授業中おしゃべりばかりする」「予習をしない」「復習をしない」「読むべき基本文献を読まない」「ノートを取らない」「テキストを買わない」等々をもって我々が学生を最終的に「切る」のは、前節で述べたように、「自分の専門分野において、所詮共有できるものがなかった」からだ、とりあえず考えられます。大学制度への想い故、価値観の拠り所としての個への重視は大きなものがあるのですが、その点で「個人として共有するものがない」という言葉は自分へも、(給料を払っている)世間へも容易に受入れられます。

こうした形態での個への賛美は、他方で自律性の強調へつながります。「自分は感動を受けた、この感動を大切にしたい」、「研究者になってもっと勉強しよう」、「勉強を深めるにはどうしたらよいか考え、行動しよう」…。こうした手段と目的の体系が自ずと頭の中に浮び上がってきます。手段はあくまで目的遂行のための手段ですから、目的に對しては価値判断が行われても、手段それ自身は技術的・中立的なものともみなされます。

個を大切に、その上で個の自律性を大切にすることは、多様性を重視することでもあります。「最近の学生は画一化されてしまって…」という嘆きもしばしば耳にするところです。個人的自由主義や、目的意識に基づく自律性の重視といった、誰もが納得するであろう価値観が

我々の存在を支えているわけですが、「情念」だとか「感動」だとかいった主観的な部分を排除して、純粹に我々の行動形態を見てみるとどうなるでしょうか。

研究者になろうと思いつく。そのために「大学院」に入って「勉強」する。「勉強」の仕方は研究室を通じて継承される。論文を書き、「学会」に入って発表し、社会的認知をしてもらおう。就職する。

ここで素朴な疑問が出てくるのです。同じ様なライフ・サイクルは同じ様な思考上の方法論につながるのではないか。そして同じ様な方法論で以て得られる結論は、その思考の型からしてどこか同質の構造をもつのではないかと。我々は「知」を一般的な形で語るには、あまりにも同じ生活様式(=知を獲得するための技術体系)のもとにあるのではないかと。

我々の生活と、我々が相対している学生の生活とを比べてみましょう。1973年以降のフランスにおける経済的「危機」に関する論文の一部を引用させていただきます。

経営者は、アブセンティズム[無断欠勤]、「ターンオーバー」[職務の異動]、労働に対する幻滅を取り上げて、労働崇拜が危機にあることを主張する。経営者の主張として、これに続いて『今日の労働者は、先輩たちに比べて規則正しくなく真面目でない』ということである。労働者の多く特に若者は熱心さが足りず、「彼らはでたらめな仕事をする」——そこに危機の原因があるというのである。——そしてしばしば、このような言葉は、怠け者たち全員を労働に就かせることのできるような「指揮者」が(企業にも、国家にも)いないことへのノスタルジックな嘆きから出てきている。『現代の経済危機』、ドゥニ・クレール他、坂口明義訳、新評論、1991年。36～37頁)

「経営者」を教官に、「労働者」を学生に置き換えると、そのまま我々の日常の嘆きとなります。しかし、筆者は次の様に続けます。危機に

さられている、我々もかつて行ってきた「労働」とは、「一方でそれは、細分化された、反復的な意味のない労働である。他方では、生活の唯一の中心としての労働、社会的なアイデンティティ獲得の唯一の要因としての労働」だと。

こうした作業が「生活の唯一の中心」となるということは、こうした「労働」=「目的に対する手段の体系」それ自体が、目的から相対的に離れて価値を有することに他なりません。「本を読むこと」等が「細分化された、反復的な」労働であると同時に「それ自体として」我々にとって結構楽しかったりするわけです(こうした感性は日本では体育会系と呼ばれる人達に顕著ではありますが、彼らに限るものでもないでしょう)。本を読んで、要約をして、他の論文と比べることだけで成り立つ論文はいくらでもありますが、それはそれで立派な論文ですし、少なくとも、本を読まずに書かれた論文よりは受け入れられるでしょう。というより、「労働」過程を経ていない論文は「知」の対象としては相手にされないでしょう。

「授業中おしゃべりばかりする」云々を以て学生を「切る」とき、個対個の人間関係だけが理由なのでは決してありません。学問的な理由とはまったく別のところで、研究者が育ってきた環境に基づく価値観によって、学生を切ろうとしているわけです。

個に発する情念を尊重する限りにおいて、研究における手段が中立的な技術だと我々は(建て前上は)言うわけですが、様々な場面で我々が判断の基準とするのは、内容よりもそうした技術そのものです。ここでは詳しく論じることはできませんが、システムは目的と手段の有機的な統一体であるという一般論から離れて、日本の精神風土における手段と目的との関係の転倒が問題にされるべきではないでしょうか。

手段や技術は、本来価値的に中立ではないわけですから、それを以て学生を「切る」こと自体は決して非難されるべきだとは思いませんが、比較的システム化が容易な手段の部分だけに目を奪われ、目的=「感動」に至る道を個の領域に安易に還元してシステム化しようとしな

いのは、少なくとも職業人としては問題なのではないのでしょうか。

### 2.3 学会というもの

それでも「感動」のような情念の領域に逃げ込める間は何とかやりくりできます。しかしながら、労働＝研究活動の場である大学は、「生活の唯一の中心」であるだけでなく、「社会的なアイデンティティ獲得の場」です。人間はどうあがいても社会的な動物なので、情念を他者に表現することができなければ、閉塞感で窒息死するに違いありません。問題は大学という「アイデンティティ獲得の場」の特殊性です。

研究者にとっては言うまでもないことですが、アイデンティティは、大学と表裏一体の関係にある学会そのものによって、あるいは学会を通じて獲得されます。

就職前の研究者においては、学会はそこに帰属することによって、個々のケースに応じて、社会的にも金銭的にも彼の将来を保証します。学会に所属することなしに長期の失業を耐えるのは難しいことでしょう。

こうした世俗的な機能もさることながら、学会に参加し、研究者としてのアイデンティティを満たせる（と思える）のは、そこが知の形成・深化の場であるからでしょう。情念という優れて個別的な思いが、同じライフ・サイクルを共有することによって形成される等質の感性によって増幅され、共有している仲間同士の間で普遍化される。こうした普遍化過程の中に身を置くことで、研究者は極めて大きな快樂を得るでしょう。個別的な情念と、普遍化の快樂と、研究過程での艱難辛苦とは三位一体のものです。

学会が普遍化の場であるという確信は、そこでの普遍化の過程への信頼でもあります。人文系と自然科学系とでは見掛け上の相違はありますが、「有意」なデータを可能な限り集め、それを基に仮説を立て、「メンバーみんな」で検証するという手続きを経ることに変わりありません。データの扱い方、仮説の立て方、検証の仕方についてはあらかじめ取り決めを行っておき、後は時間的・空間的淘汰に任せる。こうす

ることによって、人為を排した普遍的知識への道が開けるというわけです。

こうした学会の機能の仕方を見ると、その歴史的な意義や妥当性を別とするならば、「どのような、どれだけの手続きを踏むか」ということが、普遍的知識へのハードルだということになります。そういう手続きの在り方が近代産業社会における価値観と重複しながら（皆が納得すること、「持続的・反復的な努力の賜物である」こと）、学会が、あるいはそれに所属する研究者集団が社会的な評価を受け、そしてまたこうした評価を受けることで精神的な吸引力を社会に発揮しながら、再生産を繰り返してきたわけです。

このように考えるならば、「手続き」に対する社会的評価基準が変わった時、学会という名のもとに提供されてきた普遍的な知識は意味を失うことになります。本論での問題意識に即して言うならば、学生と「感動」が共有できなくなったということは、研究上の「手続き」にともなって発生する感動が、学生という姿を通して我々の前に姿を見せる社会の感性の琴線に触れ得なくなったということになります。同時にそれは、我々が持つ知のイメージそのものが、現代における知のイメージと乖離してきたということも示しています。

### 3. 公害問題に見る知の在り方 — 組織に由来する知

学会での「手続き」に代表される、一般的な知へのアプローチの仕方が変わりつつあるということ、かつて60年代における最も大きな社会問題の一つであった「公害」問題に見てみたいと思います。

振り返ってみて、公害問題という時に一体何が問題だったのでしょうか。「被害者と加害者の区別が無い、あるいは分りにくい、あるいは不明確なために、それまでの社会問題に比べて複雑な性格をもつ」とか、「科学的にも問題の因果関係が立証しづらい」などと言われ、こうした理由のためか、的確な社会的救済措置を発動できずにいたずらに被害を拡大していくことにも

なりました。

このように様々な問題を孕み、様々な側面をもつ公害問題に対して、どういう総括がなされているのか興味深いところですが、ここでは次の点に注目したいと思います。

- ・「因果関係」の「立証」が重要な役割をもっていたこと。
- ・「立証」が学者によって行われるものとされたこと。
- ・過程の全体が裁判という形式を取っていたこと。

これらの点から知に関する社会的な合意を読み取るならば、当初、少なくとも人間の生存に関するような問題について普遍的な合意＝知識が存在することに対して、正面切って反対するものをもっていなかったことがわかります。当時はまだ、学者世界に対する幻想——普遍的知識に最も近い場である——が生きていたことでしょう。

一方、公害問題が法廷闘争として現れたことによって次のようことが伺えます。とにかく、当時の日本人にとって最初に組織があるわけです。裁判所とか、学会とか、行政とか、会社とか。そうして、それらは一定の人格を持つもののごとく扱われます。裁判所は正義を、学会は真実を、行政は公正を、会社は快楽を(あるいは社会的無責任を)を体現しようと、ほとんど無条件に考えられています。なぜならば、体現するという目的のためにそもそもそれぞれの組織は存在しているのだという、組織の合目的性が前提されていると同時に、時間をかけて合議すれば目的が達成できるという組織を成り立たせている手段への盲目的な信頼もあるからです。

公害裁判の過程においては学者の優柔不断がしばしば原告側から非難されましたが、これは明らかにお門違いです。未知の問題に対しては、学会では「統一された明確な結論」が簡単に出ないのは学会の、研究者の精神の構造上当然のことです。学者が良心的であればあるほど、限られたデータから、政策と結び付くような社会的な責任のある結論を出そうとは思わないでしょう。素速い対応は学会としての自己否定につ

なかりかねないのであり、こうした傾向は学会に限らず、近代社会の組織全てに少なからず共通するものなのです。

公害問題がどういう結論を産み出したのかは別として、知の在り方がそのまま組織の在り方＝組織が存続するための技術的な体系に結びついたものであることが、次第に我々の意識に上るようになったのは間違いないところでしょう。政治の潮流を見ても、二大政党制の没落から現在の連立内閣成立に至るまでの過程は、もっともらしい本質論や方法論の裏側に存在する組織の論理、組織に取り込まれた人間の情念に気付きつつある過程だとも言えます。こうした社会の流れの中で、我々が当然のこととする「手段の体系」を学生が忌避することの意味を考えなくてはならないのではないのでしょうか。

#### 4. 終わりに

——我々をつまづかせているものは何か

本末転倒の感がありますが、知の在り方についてこうもくどくどいつてきた理由をもって、結びにしたいと思います。

この小論を書く場合もそうでしたが、「こういう表現の仕方をしていいものだろうか」という気持ちが、一文一文につきまといまいます。それは第一に、裏付となる私個人の「知識」量の問題であり、文章力の問題であるのですが、それと同時に、私がかつて身につけることを要求された様々な規範(そして、その規範への美的憧憬は今でも厳然としてあるのですが)との葛藤でもありません。最終節を書き始める時に、耐え切れなくなって私は「である調」から「ですます調」に変えてしまったとたんに、筆が動き始めました。これもまた、単に能力の問題、あるいはせいぜい人文科学に限られるような問題なのかもしれませんが、こうした思考の自己規制は、学会という社会に対して利害関係をもつ組織集団に特有なものではないかという気が、最近ますますするようになってきてます。人文科学に特徴的とはいいましたが、学会という組織から知識が生まれることの意味を最初に問い掛けたのは自

然科学者であったクーンですし、この小論の思想的基盤のほとんどは彼の「パラダイム論」に負っています。問題は知一般にまたがっています。

一つの主張を行うのに、どういう論理展開を使うのがいいのか、どういう言葉使いをするべきなのか、およそ、学者とよばれる人達は研究室で徹底的に鍛えられます(私は途中で放り出されたくちですが)。そこでの資産が、職場における様々な自信となって生きるのですが、同時に「言葉」に代表されるような思考のための道具の持つ呪術性を忘れて、研究の方法論のみならず、知識(体系)までをも簡単に客観化、普遍化してしまいます。大学の改革が遭遇する問題のほとんどは、ここから生ずるのではないのでしょうか。

学者は自己評価を嫌がります。多くの教官は自己評価に対して否定的です。やや短絡的ですが、学会の評価システムが、どこか根底のところで現代的な知の在り方と遊離していることと関係しているような気がします。

授業を見られるのも嫌がります。もちろん日本人が恥かしがり屋だからでしょうが、論文を学会で「見られる」のが恥かしくないのは、単に面と向っていないということだけではなく、

論文とその過程に関わる言葉と形式を通じて「守られている」という感覚があるせいではないかとも思われます。言葉や形式を遵守しているという安心感です。そしてこうした形式を遵守していないという感情的な怒りが学生に対しては最初に立っているような気がします。大学という組織の、大学人としての生き方の決まりを守っていない、という思いです。しかし、自由・自律を重んじるならば、新しい「決まり」の可能性を考えるべきでしょう。

我々は、これまで自分達の指針となってきたと同時に、我々を組織的無責任に引きずり込んできた大学人同士での共犯関係からできるだけ早く抜け出す必要があります。そうでないと、「みんなで考える」という姿勢はなかなか生まれられないでしょう。目的を優先する、あるいは目的のために手段を考えるという発想は、きわめてドライな人間関係を一面では産み出すことでもあり、我々が慣れ切ってきた組織の庇護から離れることになるわけですから、なかなか辛いところがあるのですが、給料をもらうものの責任として、そして自ら持っている(と信ずる)能力を駆使する楽しみとして、それくらいの努力は惜しむべきではないと思います。